

閱 覧 ニ ュ ー ス

82 号

1998. 1



「垣根ことば」と「ことばの垣根」

西村月満

ことばは、人々がお互いに共有しているシンボルを用いて意思の疎通をはかり、人と人を結び付けるはたらきをします。しかし、ことばの使い方の相違が、人と人を分ける場合もあります。後者の、人と人の間の垣根を明らかにする例として、英語の hedges（「垣根ことば」と訳される）を取り上げて考えてみましょう。

英語の hedges というのは、表現を和らげるはたらきをする言い回しのことで、別名は downtoners, softners などです。元々は「生け垣」という意味で、それが「防御するもの」へと転じ、さらに「一つの事柄、意見を断定して失敗するのを避けようとして自らを守ること」を指すようになりました。こうした「垣根ことば」がどのように人と人を分けるのか、三つのケースをあげてみます。

(1) 「垣根ことば」と異文化間交渉：あるアメリカ人研究者が、日本人とアメリカ人の間で交された英文ビジネスレターのやり取りを追跡調査し、日本人のリクエストの書き方ではアメリカ人の合意が得にくい点を指摘しています。日本人は必ずりと直接的に要請せず、相手の感情を思ひばかり婉曲に示唆する書き方をするのですが、それはアメリカ人を真剣にその要請に取り合う気持ちにさせるには弱すぎるのです。例えば some time in the future, one thing to be improved in the future might be, if the situation allows などの hedges を多用した場合がそうです。遠慮を美德とする日本人が hedges を多用した慎重な発言の仕方をする、と、リクエストのインパクトが弱まるばかりか、言質をとられないように曖昧な言い方をしているのではないかと、ネガティブに取られることもあるのです。アメリカ人は相手に要請する場合、相手方のど

ういう条件に即してこちらが申し出をするのか、また、こちらの申し出を受けることが相手方にとってどんなメリットがあるかなどを you を主語にして丁寧に説明します。こうした特徴からアメリカ人の商業文は you-attitude letter と呼ばれます。アメリカ人と交渉する際、こうしたことを知っておく必要があると言えるでしょう。

(2) 「垣根ことば」と男女の垣根：1970年代から盛んになった言語社会学は、種々の社会的集団に固有のことばの使い方の特徴を明らかにしてきました。男性と女性のことばの使い方の相違もその主要なテーマの一つです。

一般には話し言葉において女性の方が sort of, more or less, it seems, I guess などの hedges を多用すると言われています。こうした hedges の機能をもっぱら話し手の「確信のなさ」を表わしていると解釈し、女性がそれらを多用するのは、女性の方が男性より丁寧な表現を好む傾向があるからだけでなく、女性の社会的地位が男性に比べて不確かで、男性より社会的に無力なためである、と主張した言語学者（男性）がいました。

しかし、このような見解は女性についての固定観念からきていると反論をした言語学者（女性）が、hedges の会話における機能を注意深く分析し直しました。そして、hedges には認識の確信の度合と関わる epistemic な機能と、人間関係上相互作用をなめらかにする interpersonal な機能、の二つがあることを明らかにしました。そして、女性は聞き手に対する気配り、丁寧さ、連帯感を表わすものとして hedges を用いることが多く、男性は事実認識の不確かさを表わす場合に多いと、指摘しています。

(3) 「垣根ことば」と科学論文：英語で書

かれた自然科学論文では、事実 (fact) と意見 (speculation) を区別する必要から、筆者の主観的判断や仮説、不確かな要素のある事柄については、hedges を用いてそのように表現することに注意が払われています。例をあげると These facts suggest that ～, It is likely ～, These results indicate ～, … appears to ～, などです。こうした論述の仕方は、「思慮分別のある慎重さ」として評価されるのです。つまり、科学論文では hedges を使いこなすことは、識別能力が高い、あるいは認知能力が発達しているとしてポジティブに受け取られるのです。hedges を適切に使用しているかどうか、望ましい科学論文の指標の一つとなるわけです。

このように、hedges は異文化間の politeness についての考え方の違いを際立たせることもあり、男性と女性の言葉づかいの違いを明らかにすることもあり、適正な論文表現とそうでないものとの違いを教えることもあるのです。

以上、「垣根ことば」についての三題断でした。(英語)

『北里大学図書館共通利用カード』をまだ受け取っていない人へ

5月に交付しました『北里大学図書館共通利用カード』をまだ受け取りにきていない人がかなりいます。図書館を利用するには、このカードが必要です。相模原キャンパス図書館共通のものです。

薬学部・獣医畜産学部・水産学部の1年生は、教養図書館1階のメインカウンターで、医学部・医療衛生学部は医学図書館で、理学部は理学図書館で、看護学部は看護学部図書館で受け取って下さい。後期試験ももうすぐです。早目に各図書館で受け取って下さい。

『情報検索について』

教養図書館では、1階カウンター前の円形テーブルに、利用者専用の情報検索用端末を1台設置してあります。現在この端末からは教養図書館の資料ばかりでなく、相模原キャンパスの全図書館(医学図書館・看護図書館・理学部図書館)の蔵書検索もできます。又、Medline 検索も可能です。手作りのマニュアル『蔵書検索のすすめかた』を参考にして利用してください。わからない点は、図書館員にお尋ねください。CD-ROMの利用もこの端末でできます。

1. 世界大百科事典 (平凡社)
2. The World Book Multimedia Encyclopedia (World Book)
3. 理科年表 1996年版 (丸善)
4. インターアクティブ人体百科 ヒューマンボディ (DDP デジタルパブリッシング)
5. Bibliotheca Electrica Dictionriorum Asciana 辞・典・盤 (アスキー)
 - ・岩波国語辞典 第5版 (岩波)
 - ・新英和中辞典 第6版 (研究社)
 - ・新和英中辞典 第4版 (研究社)
 - ・朝日現代用語知恵蔵 (朝日新聞社)
 - ・マイペディア (平凡社)

上記のものが最近よく利用されているようです。但し、以下の資料(CD-ROM)は、従来通り、カウンター内のパソコンを使用させていただきます。

1. 雑誌記事索引 1990-(国立国会図書館)
2. 科学技術文献速報 (日本科学技術情報センター)
 - ・環境公害編 1995 -
 - ・化学・化学工業編 (国内編) 1995 -
 - ・物理・応用物理編 1995 -
 - ・電気工学編 1995 - 96
 - ・ライフサイエンス編 1997 -
3. 国民経済計算年報 1997 - (経済企画庁)
4. 情報管理 1997 - (JICST)
5. 戦後50年朝日新聞見出しデータベース

「啓事」

松原俊峰

「一番辛いのは何ですか。入院していることですか。」と、患者さんに冗談まじりで聞く事がある。

入院は、非日常的な空間で、生活する場所ではない。患者さんは、自覚症状が強ければ、入院している気にもなるだろう。しかし、自覚症状も緩和され、退院が迫っている、長期入院、仕事や学業が気になっているときなどは、退屈したりいらいらもするだろう。入院生活の送り方も、テレビを見ている人、ラジオを聞いている人、本を読んでいる人、何もしない人、同室者の人と話している人、ひたすら寝ている人と、様々である。

患者さんだけでなく、その家族も時間をもてあますことがあり、特に子供は病院内では走り回れないし、静かにしなさいと言われる。患者さんの状態が良い時は、家族は、患者さんとそれなりに話したりできるけれど、例えば、患者さんが検査や治療で、その間待っている時や、患者さんの状態が悪くない時、ずっと病院に待機している場面などに遭遇する時がある。

ロビーには、『ウォーリーを探せ』という絵本が一冊だけあった。小学生の子供が週末に面会にやってくる。大人達は、大人どうし話しているが、子供はすぐ飽きてしまい、絵本をいつの間にか見だす。次の週もまた同じようで、その子は、飽きてしまい、同じ絵本を見ている。同じ本で、満足できるならいいのだが、面会の子供は、その他にも何人も来ている。

私といえば仕事が忙しいと言い訳しながら活字から遠ざかり、新聞でさえろくに読んでいない。そのくせ、毎日テレビだけは見ている。

好きな映画で、LUC BESSON 監督の LE GRAND BLEU というのがある。素潜りの選

手権（フリーダイビング）の話で、2人の主人公のジャックとエンゾの人間関係を描き、深海の魅力に取りつかれ、現実からはなれていく。広い海を舞台に美しい映像が繰り上げられる。映像は、視覚からの情報で、具体的にイメージに残る。時間が区切られていて、見ているだけで、映像は流れていく。

自分の部屋の整理をしていて、読まなくなった本があったので、病棟婦長の許可を得て、病棟のロビーに置かせてもらった。持っていたからにはどのくらい読まれているか、やはり気になるので、患者さんに何気なく聞いてみた。反応は様々で面白かった。2、3冊ベットサイドに持ってきて読んでいて、朝早く起きていかないと、いい本がなくなるので、早起きをして取ってきたと。夜テレビを見るので、光が漏れないために大きな本を選んで、テレビの回りを囲うために持ってきたと。細かい字は読みにくいし、ロビーまで歩いていくのも大変だし、置いてあることも知らなかったと。

患者さん自身が本を持ってきたもいる。せっかくの入院だから、普段読めなかった本を読んだり、暇だから、いい機会だから読もうなど。『癌』についての本をベットサイドに置いている患者さんもいた。

読書をすることで、日常からはなれた時間を、患者さん自身のペースで、流れていくのではなく、流れを作って、興味のあることや、気になっていることを深め、解決することができるきっかけになる。たかが、本一冊でも、その人の精神状態や、背景がなんとなく見えてくる感じがする。本を読んでいる患者さんを見ると、「何を読んでいるのですか」と聞くようにしている。

病棟内のロビーには、患者さん、家族向けの本はほとんどない。娯楽にしても、医学関

係にしても皆無に等しい。学園内を見てみると、本の宝庫、図書館はいくつかある。研究者、学生、職員、研究者向けの資料は、大学病院だけあって沢山ある。学園内部の宝物を、その中の人達でひっそり利用している感じがする。許可を得れば、一般の人も図書館の本を閲覧することはできるだろうが、果たして、患者・家族の何人の人があえて学園内の図書館に足を運ぶだろうか。

病院内のロビーや待合室にミニ図書館があったらと思うことがある。図書館となると、管理やコスト面などで、実現できないと思う。また、「医療者にとっては、都合の悪い本」など、だれかが勝手に置いてしまうと、管理上何とかとも言い出されそう。家で眠っている本を持ちよってでもできるが、できることなら、組織的に行って欲しい。暇だから、ロビーに行って本でも読むとか、自然に本が読めるような環境が作られたらいいと思う。本を読まない人は読まないし、必ずしも置いてある本が読まれるとも限らない。私立大学であるが、図書館は、図書館に来る人だけに開かれるだけではなく、本が必要な状況にあるとき、どれだけ提供できるかだと思う。

(北里大学病院救命救急センター)

『投稿依頼』について

教養図書館では、閲覧ニュースを年3回発行しています。1973年5月に手作りのものからスタートして24年が経ちました。現在のような、表紙解説、各先生方のエッセイという形をとるようになったのは36号(1982.10月発行)からです。この閲覧ニュースでは、皆さまの投稿をお待ちしています。本や図書館に関わることで日頃考えていることやエピソードなど、書いてみようと思われた方は是非、教養図書館カウンターの係の者に声をかけて下さい。楽しい投稿をお待ちしています。

『購入希望図書について』

教養図書館では、より多くの方々に利用していただくために購入希望図書制度をとっています。利用者の皆さまから購入希望を出していただいたなかから(予算の都合上、あるいは内容的に片寄っているものなど全ての希望に答えられるわけではありませんが)、できるだけ皆さんの要望をとりいれていきたいと考えています。リクエストの本(ビデオ等も可)がありましたら、教養図書館備えつけの用紙に記入の上、カウンターで申し込んでください。下記のリストは今年度受付したもので購入が決定されたものの一部です。

購入希望図書

〔書名〕	〔請求記号〕
1. イングリッシュペイシエント	933/O65
2. 医療保険改革の構想	364.4/H71
3. 澁澤龍彦の少年世界	910.268/Sh21
4. アルコール依存症の精神病理	493.78/Sa25
5. 官僚病の起源	304/Ki57k
6. ノン・ドメスティック・ペット医学に関するシンポジウム	649/N65
7. アンダーグラウンド	916/Mu45
8. 鉄道員	913.6/A81
9. 見知らぬオトカム	723.1/Ts41m
10. アダルト・チルドレンと癒し	146.8/N86
11. 運動心理学入門	780.14/U75
12. 民間学事典	380.3/Mi44/1-2
13. 大学時代しなければならない50のこと	159.7/N43
14. 大学生のやり方	377.15/Y44
15. モデルなき家族の時代	367.3/A43
16. フワフワした女とヒョワな男の国日本	361.6/Ma52
17. 最後の楽園	748/N55
18. 海洋化学	452.13/N84
19. 私的所有論	490.15/Ta94k
20. 原子炉を眠らせ、太陽を呼び覚ませ	539.2/Mo57
21. 女はなぜやせようとするか	493.7/A87
22. かがやく日本語の悪態	810.4/Ka97
23. 驚異の小宇宙 人体Ⅱ (ビデオ)	491.1/N69b/1-6
24. イングリッシュ・ペイシエント (ビデオ)	778.233/Mi44
25. キルトに綴る愛 (ビデオ)	778.253/Mo39
26. ベトナムのダーちゃん (ビデオ)	778.2/G72

自然科学とは、“自然界に起こる諸現象の法則性を明らかにする学問である”と某辞書に載っている。すなわち科学者というのは、その法則が何なのか、あるいはその法則に従うとどうしてこんなことが起こるのかといったことを調べ、ではこうしたらどうなるか、またこれはどんな役割を果たすのか等を考えて、なるほどそうなのかと感心したり、さらには新たな現象を発見して「おおっ」と思いたい人々なのである。

このような中で物理学者の一部の人々は、自然界で起こる現象は唯一の法則から全て導かれるという信仰を持っている。そこまで極端でなくとも、自然を記述する法則の数は少ない方がよいとは思っている。物理を敬遠する学生の多くの理由は法則の数の多さらしいので、これは朗報(?)かも知れない。さてこれは結構特別な物の見方かと言うと案外そうでもない。力学の基礎を築いたニュートンだって、ある意味この信仰の信者だった。というのもりんごの落下と月の運動は実は同じものだとする万有引力の法則は、この考え方の先駆けと言えよう。またあまり物理に縁の無い人は知らないだろうが、磁石の力と電気の力は同じものだという理論をマクスウェルという人が作り上げている。さらに相対性理論で有名なアインシュタインも晩年は熱心な信者だったようだが、この点に関しては残念ながら大きな業績をあげることはできなかった。

それではこの時点でどれくらいの法則があったのだろうか。自然界で起こる現象というが、これを司っているのは物体間にはたらく力である(細かいことを言えば当然それだけではないので、ここでは極端な場合に限る)。した

がって力にはどれくらいの種類があるかということになるが、当時既にまとめあげられて4つにまで減少していた。つまりありとあらゆる力は、全てこの4つ(実は日常必要なのは重力と電磁気力の2つでよいのだが)で説明できるというのである。アインシュタインはさらにこれを減らそうと努力していたのである。しかし彼をしても成し得なかった夢を少しだけ進展させた人物がいる。それが今回の表紙にある人、ワインバーグである。マニアでもない限り知っている人はあまりいないだろうが、彼(とその仲間達)は4つのうち2つを統一し、現在では3つにまで減っているのである。なんだ1つ減っただけかと思うこと無かれ。この減らし方はそれ以後の統一の基本的な考え方を示すことになるのである。紙面の都合上詳しく説明できないが、水と氷の状態変化のように、ある温度で同じものが全く違うように見えるという考え方を利用して、1つだったものが2つに見えるのだというような体系を作ったのである。(ちょっとウソっぽい)。彼らはこの業績により1979年にノーベル賞を受賞している。このように書く故人のような印象を受けるかも知れないが、今尚現役で活躍しており、つい最近この理論やその周辺をわかりやすく著した入門書が出版された。『Quantum Theory of Fields』と名付けられたこの本は、今後この分野を目指す学生の教科書として注目を浴びている。図書館にも蔵書が在るので、もし興味のある方は見てみる事をお薦めしたい。

さて、今後本当に唯一の法則で自然界の力が記述できるようになるのか、なかなか楽しみである。(物理学)